時評

書肆侃侃房新鋭短歌シリーズ

佐藤博之

本年六月、書肆侃侃房より新鋭短歌シリーズの最新刊として三冊の歌集が発売された。この新鋭短歌シリーズは、時流に即した歌人を公募などによって厳選して出版していることや、全国の多くの書店の短歌コーナーの広い範囲を占めることもあって注目を集めている。今回出版されたのは、奥村知世『工場』・伊豆みつ『鍵盤のことば』・藤宮若菜『まばたきで消えていく』の三冊。奥村は、心の花では当シリーズから初の上梓となった。

『工場』の基調風景は、ずばりタイトル通り工場の現場風景である。工場で働く人たちや工場の慣習と、その中で働く自分自身を確かな手触りを以てつづられる。

・ざらざらと転倒防止の床面が安全靴の底削りゆく

・労災が起きた建屋は他よりも大きめのものを吊る注連飾り

転倒災害防止の床面加工が足を守る安全靴を削るという相克は、果ての遠い安全への追及意識と、追及の難しさを対比させる。注連縄の変化は小さなことの様でも当事者には同僚たちの顔を思い浮かべる切実な祈りがあろうことが伝わる。奥村の歌には当事者としての安全意識を強く感じた。

・「長い毛は縛る」が新たに追加され実験規定の版改まる

・女子社員増えて軍手のSサイズ在庫の数を増やしてもらう

工場の現場を多く詠み込まれる中で注目させられるのは、男職場である（であった）工場の中で女性として奮闘する姿である。そもそも髪の長い女性を想定すらしていなかった規定の中で働くということ、この歌の他にも女性として働く苦悩を詠んだ歌が多く収められている。それでも歌集の終盤に収められる「女子社員増えて…」の歌では、軍手の在庫という目に見える形で女子社員の増加に、その職場を切り拓いてきた成果と感慨を読み取りたい。

コントラバス奏者でもある伊豆の歌集は、やはり音楽を扱った歌が目立つ。直接に音楽を詠まない歌にもリフレインや対句の大胆な多用など、響きやリズムの面で挑戦的な歌が目をひいた。

・残雪を蹴る爪先のごとくしてコントラバスのGisの音入る

・ハ短調ほどの質量閉ぢこめてピアノは部屋の隅に眠りぬ

・降る降る降る降る降る溢る逢ふ逢ふ逢ふ逢ふ逢、傘を閉ぢて手を振る

「残雪を蹴る」が擦弦楽器の弓が弦を噛む触覚の比喩となっている。音楽の調性には調によってそれぞれのイメージがあり、ハ短調の重さや寂しさを「質量」と掬ったのは発見だった。大胆な動詞の反復の中から、雨の日の待合せに長く待つ人が、やっと待ち人と逢うことができた感激のほとばしるドラマが読み取れる。

『まばたきで消えていく』は「死」を近くに感じながらの詩情を主とした歌集である。死の周辺として性・生などがはかなさや退廃的な雰囲気の中でつづられる。

・互いには満たしあえない空白としてぼんやりとうかぶ子宮よ

・花束を冷凍室に詰め込んでほろびる春はプールの匂い

・（心臓はどうする？）（あげる。）寝ころんで記すカードに丸は歪んで